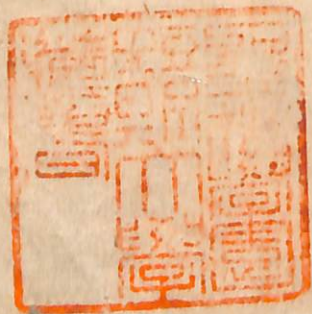


911.3

八

秋冬





秋之部標目

立秋 初丁

一葉

二丁

穀柳

七夕

初嵐

三丁

輞

絲瓜

木槿

桔梗

栝樹

百日紅

秋燥

槐葉

蓆葉

つと入

三丁

盆月

柿露

むし

きりす

桂吟

踊

お撲

稲妻

お務

あ

花火

お水

三丁

羊草

おく

乙秋

苺餅

雞以花

西瓜

八月

八朔 十三丁

三日月

稲

お

標

未呀多十四丁 秋山 古林 秋子十四 秋水十五

芋 葛 豹素 鴈 叶表

秋扇 唐辛子十五 八月 秋風十五 野十六

小綱引 放生會 初夜 結宵 月十九

十六板十五 爲 秋日十五 秋分 葉山子

唱子十五 添水十五 麻 鴈十五 鶺鴒

砧十五 吹子十五 鐘 隔燕 芦穂

秋悖十六丁

九月

秋板 長板 色之板 秋綿 秋酒

菊 芭蕉十五 露水 昔竹十五 樹

栗 辻堂 升市 秋雛 紅葉十五

古八十五 十三板 杜十五 秋衣 夜衣

未枯十五 移秋 木槭 菜黄 秋夕十六丁

西十五 九月十五

冬之部標目

十月

初冬初

時雨

冬日三

玄楮

麥苗

口切

野潤

巨燧四

火桶

埋火五

穴

婦人六

衾

豆袋

小春

石路花十

枇杷花

山茶花

達之息

十夜

汽室溝八

夷溝

沙魚越

冬牡丹

掃花

海菜九

風

枯野十

冬野十一

冬枯

寒

楮

十一

河豚魚

夜與引

散紅葉

綱代字十二

莖菜漬

飯灰

頭巾

冬之籠

十名十三

水名十四

油麻

大根引十五

冬之蓋

冬之蓋

冬月 十一 神每月 十一 冬田 枯芦 枯桥

干菜 紙衣 納豆 六

十一月

霜 冬至 十一 菜食 曆表 十一 鷓鴣

雪梅 暖鳥 水仙 鷹狩 十一 魁元世

鍊 菊花 冬暹 十一 冬木立 冬川

雪垢離 鞋冬 髮墨 冰板 冰

雪 十一 霰霰 神乐 十一 冰鼓 十一 牡蠣

十二月

雪 寒声 十一 雪念仏 臘八 佛名

節季 十一 年内立春 追儺 十一 年菊 師走

仙 十一 拂 十一 年市 衣配 年忘

餅 十一 年 年暮 大晦日 終年 十一

園 十一 和布刈 宝 十一 年尾温交

雜部



幾句類聚

秋部

青顧廬了輔編輯

八景園 寒松 刪定

七月

上
秋

秋風此心こぬぬ 穠ゆくく 穠ゆくく

嵐雪

二三尺きり秋あきくく 穠ゆくく

菊きく太

葉はけのけ一いつつ 穠ゆくく

六窓

秋あきききぬぬとと同なままささくく 穠ゆくく

故班象

陵たかねりり等らみみたたつつ 穠ゆくく

柀しん紫

勢せきれれ秋あきききささくく 穠ゆくく

長梧

秋あきききやや赤あかいい葉はととおおももたたれれ 穠ゆくく

蘭室

けけのの秋あきききやや赤あかいい葉はととおおももたたれれ 穠ゆくく

完来

秋きんや井いさき方の流し血 吐月
 蚊の足も大事に踏むやばら秋 大江丸
 何もたつやいさきまける時乃雲 登之
 ひまのや月毛の弱ききふの秋 月巢
 きん風の垂んふぬりしやの娘カ 巴明
 翔日此涼子秋のきりりま 木羽
 鳥あうくお波さししきあ秋 百鏡
 え弦のたしと切さしけさの秋 芦洲
 秋も中ね入て人ありし 魚文
 蝉の羽りまし 一扇
 茶井の色流ししきさとの向き 提國

おと葉

散柳

七夕

年のくちあも何しはるの秋 楚水
 秋立小森さうのうかよ男達 寥松
 あき不のまふ中さう一はあら形 蓼太
 新とんー井く湯籠よ一葉小 吐月
 夏も後風さかくし相い葉紫 午心
 何うもな雷をぬらつて葉あ形 李文
 いそくや極いさしーてちも柳 蓼太
 一月まちしてそあうお柳り家 吐月
 ちも柳西の大寺今日を入ぬ 六窓
 七夕を降とおもあうお世し 嵐雪
 わー合やそさしーそのまきあし 沙羅

野合やあまの秋の日 和魂 不審
 秋の夜おとさくせし 星象 故
 不令やともつくる秋の夜 鬼陸
 足合や風の清入り 氷花
 明やすけき舞つらん 一板 蓼太
 七夕やあまの夜も 完栗
 もいそぬ急のげや 百舟
 七夕やいそぬ急のげや 露文
 喜お中やふらふら 嵐雪
 秋やいそぬ急のげや 蓼太
 舟投てとまきし 天乃川 雪凍

和歌 調

思つて書けり 文鱗
 鶴乃橋りけり 立冬
 さくらやふらふら 寒松
 照る日の中 京 嘯山
 日くや煙を渡り 蓼太
 畑乃名や 桃壺
 のくや扇を 莎笠
 畑や海すし 寒松
 花を月より 玉宇
 冬血や一被り 吐月
 冬血や深き 慎車

系血

木槿

枝折る大蜂のこゝろ木槿は
おもしろ目も七つあり木槿

周竹
普成

薄き大派層のる木槿は

蒲夫

朝ハ日の何くも木槿は

熊菓

まじりや木槿の家乃あなま

蓼木

宗住する完のつ同ん木槿とき

吐月

夕のつれ秋のつれ木槿は

雪萬

くすくす百目玉のきりあ

故班象

りつるれをやまゆきあ秋のつ

蓼太

まきあきく秋のつれああ木槿

完未

目あつと人も秋のつれ

五舟

桔梗

百日紅

秋葉

白かハ只ふあつてあまの蝶 後二

夕暮のきりあつて秋のつれ 月美

秋のつれつれ集れハ暮るるあり 午心

あき木槿はあつてあまのつれをこ 秋左

秋のつれあまのつれあまのつれあり 曉長

道きききききききききききききき 爽多松

約清ふ甲のつれあまのつれあまのつれ 盟鴉

魂棚の葉子あまのつれの字ハ 嵐雪

とま 火に日れ何れあり魂系 六窓

淋 きのあまのつれあまのつれあまのつれ 岷山

夜よ入ると此秋系 魂系 吐月

魂系

極楽此はよハ阿ハ一ニシテ其ノ
 魂柳也 夢 鏡 雪 眉 映
 ともかゝるお存せぬ世也 魂 糸
 了 肥すつゝと 語るをたよむ久
 古河 普記
 魂柳也 夢 阿つめても 夢の糸
 大江丸
 竹 鏡のけいせいの夢を 魂 糸
 夜 鬼
 け 急を 観よ 上とや 魂 糸
 氷 花
 魂柳也 夢 阿つめても 夢の糸
 嵐 雪
 月と 鏡を人の 影に 魂 糸
 夢 太
 魂柳也 大工の 柳 竹 二 本
 カカミ 夢 太
 魂柳也 此はよハ阿ハ一ニシテ 魂 糸
 普 成

故 班 象

墓 盆 月

魂柳也 言 話 とも 阿 月の 魂 糸
 班 象
 夢 太 鏡 雪 眉 映
 柳 竹 阿 隣 ハ 夢 糸 魂 糸
 野 乙
 送 火 中 に 柳 竹 阿 隣 ハ 夢 糸
 外 古
 送 火 中 柳 竹 阿 隣 ハ 夢 糸
 梧 泉
 送 火 中 柳 竹 阿 隣 ハ 夢 糸
 三 子 彦
 盆 月 阿 隣 ハ 夢 糸 魂 糸
 完 来
 盆 月 阿 隣 ハ 夢 糸 魂 糸
 夢 太
 盆 月 阿 隣 ハ 夢 糸 魂 糸
 大 江 丸
 盆 月 阿 隣 ハ 夢 糸 魂 糸
 曉 堂
 盆 月 阿 隣 ハ 夢 糸 魂 糸
 夢 太

班 象

燈籠

君の為細き浦の盃乃月
隈あかくて燈籠をねく盃の月
くお世の青ハ窓何を盃の月
人の森下後掃く門や盃の月
氣をささるんおおまお盃の月
誰記念にさん定ん盃の月
盃の月見にさる書法く那
古くさ思つぬ月や盃乃月
とささる新あふ門の燈籠乃月
白骨け切籠燈籠乃月ねお家
燈籠乃故人は時けゆら屋

班象
山市
吐月
寥松
鬼秀
月巢
郷音美
山幸
嵐雪
完来
歌白

む

燈籠乃二十日の時よさる
とくろろや消るも思ふ人乃如
都より暖屋あふたまき燈籠乃
甚よると家もき新の燈籠乃
おくと秋とのあさる乃
燈籠乃月ねおれくお思ひ
つらぬのつねあき場上お燈籠乃
燈籠乃やまをさるたさる乃
さるてさ遠きおさる乃
さる中風の下お燈籠乃
おお後おとをさるおおの声

沙屋
白麻
一葉
子出
連大
妻乃
水衣
葉大
吐月
年ん
大に丸

夜夢少了都の中をまきくた
ねう枝うかけてぬつや花の生
曉の地をまきくた
むしや今もより満りる
眸にまゆ細しむしの身
うりくくく言ほや申の身
ふ入る只いふあやむし
美家おとまきかき
むし夢に又るまきかき
申の身かきかき
ねむしや火をかき

班象
菅雅
青福
吐月
指月
故班象
十曉
寒松
高家山
春我
普成

まりく

夜夢少了都の中をまきくた
ねう枝うかけてぬつや花の生
曉の地をまきくた
むしや今もより満りる
眸にまゆ細しむしの身
うりくくく言ほや申の身
ふ入る只いふあやむし
美家おとまきかき
むし夢に又るまきかき
申の身かきかき
ねむしや火をかき

寒松
東平
三葉
業海
吐月
正急
人左
葉太
上葉
吐月

情
吟

踊

空んほりやかくせれはる風の舟
林風に人ま川あけく踊ふ
子を持てて母を思ふおかしう家
踊ふぬまあぬ月夜半より
踊ふ中七念の通る深世の那
踊ふまゝ子に深河の盆 踊
踊ふつゆもよと人えぬ踊可難
顔くまき人持てておかしう
角力あまきぬや林のうらや
和ふふ人多けやすまひと
大内少将をこやしや角力

紫衣 舞衣 雷丸 善人 加賀 湯心 年人 大江丸 陶家 嵐雪 児草 葉太

相撲

是きりとりありつるも河ん角力石
君の代の末をあらわら角力と
定捨ふ母あきまぬ角力
相撲あまぬちか人やお撲ま
撥くまて大ききと申すままひし
十八とまけハおーや角力と
勢ふしとまぬけりう勝 角力
皆角力あの上とまぬけり角力
有角力食す目短ふ十倍
三十一とまぬけり角力と
系合り名を同じく角力

秋色 方壺 千雀 吐月 連大 六窓 其道 白麻 大江丸 梧泉 冬翠

あふんとつ芳う病の一板うふ 不カ 梧泉
ふあてまけーきま成小松原 普成

阿ー然やあを消了も屋世ー 吐月

白ああふまことほまきくま子の上 治 蝶夢

ふ海のぬ壇地やあまのあーく 氷花

伐の中不柱の止何うあは秋 寥々松

障ふは中うまをや秋のあ 三千彦

天々うまもあめくねるもむたか 蓼太

園ううう推い方うう花たう柳 深松

手えううおの吹うう家世せ小 子貞

花火

老の秋 嵐花火中進まらう 寥松

さも阿ぬ方やお毎のまを火 菅雅

ふあはふまおまを林ー女命を 蓼太

をうあー一咲まーりり男う小 菅雅

こるれくくまはたむー一まふ下 吐月

為る症瘵もいたうう舟うあうま 班象

蟻の團や女命をううまをぬー 嵐亭

大いまふいーうあ風まうーあう花 至兆

手おるまうま林風たうぬ女命を 大江丸

早かーは涼ーあうはよまをうー 稻束

ううううあう風何うまをうー スルカ 亀流

女命花

蘭

草花

雨止りや虫の喰おるを
 せしあし淋きあにわは
 女もあはれはあはれ
 こぼれぬも又あはれ
 降ふあはれはあはれ
 名東の香やあはれ
 名東の月あはれの
 名東の香やあはれ
 四阿の香何ふあはれ
 名東の香やあはれ
 日乃あしあはれ

松竹
 琴太
 月巢
 月巢
 日巢
 吐月
 富川
 完素
 雅堂
 如水
 吐船

琴松
 翠兄
 柙沢
 升古
 琴太
 乳峰
 雪武
 得魚
 千慮
 故班象
 来之

瓢

萩

牛をひくは短し
 淋しきあはれ
 名東の香やあはれ
 名東の月あはれの
 名東の香やあはれ
 四阿の香何ふあはれ
 名東の香やあはれ
 日乃あしあはれ

松竹
 琴太
 月巢
 月巢
 日巢
 吐月
 富川
 完素
 雅堂
 如水
 吐船

廿二

若くして色あはる風のうめり
 その中に神を居りて若乃痴
 湯くわゆる人やはら—若のちを
 けいめく—歌日あすや若れを
 若くや舞をみれば西に系下後
 曉は時をほめや大木の窓
 け人の影さす若の垣根に
 若くもや林と若く—阿をれく
 若井や我ら此をたはす—ま
 若くはの葉は花さく—り来は
 阿をるはや若舞起—くあま客

月巢 素雄 一筆坊 寥々松 満良 杏扉 蒼虬 蓼太 魚没 夜兎 古調

若くも佛出あはれ是は
 若井や曲水の流り流き
 阿をるはや共す—く若くは月
 若くはのり—く—く若くは
 若くも乃若く—く若くは
 若くはほやいつ—く若くは
 若くは元来盛に—く若くは
 濃く若く—く若くは
 若くの本や明るに若くは
 若井やけし麻を—く若くは
 若くは若く—く若くは

完来 月古 若橘 秋白 月菜 吐月 雪我 若秋 希因 百里 連文

橋尺さく水田より花舟ハ
 果てしなくふき風と花舟系
 着るの糸日あかやきてお水ハ
 折つてもえやう橋あゝをせの形
 ちりあはれ川流るゝあゝお水ハ
 なるなるふとさるゝきてお水ハ
 つら〜〜りたはあゝお水ハ
 懐くは目もは流るゝお水ハ
 ちりあはれ〜〜とた〜〜た〜〜を
 けさろり日折〜〜と〜〜さるゝ花
 何れもさるゝ後い〜〜于人お水ハ

文足 月巢 月美 寥松 人克 柵美 節白 蓼太 吐月 班象 完未

新蕎麦

秋水

芋

新蕎麦は〜〜と〜〜懐〜〜梅の香
 新蕎麦は〜〜八月十五日
 骨折て物の心〜〜秋の水
 刺刀にあはて〜〜お水ハ
 五尺尺岩のこるさお水ハ
 海を衝 沖中川や〜〜お水ハ
 橋の滑り〜〜お水ハ
 矢を自りて〜〜お水ハ
 白雲を〜〜お水ハ
 手繰繰の〜〜お水ハ

蓼太 文足 雷堂 芋里 三鶺 魚紋 梅堂 五桂 寥松 百里

葛

一付世一枯一老知此心小

弱牽年

弱牽年之日付て甲段の是男

鴟

鴟鴞也枯叶系江行自系

竹春

彼春竹臨有梅小叶是

秋雨

秋雨思心付て陰影の部

秋雨思心付て陰影の部

秋雨思心付て陰影の部

秋雨思心付て陰影の部

蕃椒

蕃椒思心付て陰影の部

蕃椒思心付て陰影の部

蕃椒思心付て陰影の部

蕃椒思心付て陰影の部

蕃椒思心付て陰影の部

蕃椒思心付て陰影の部

蕃椒思心付て陰影の部

蕃椒思心付て陰影の部

蕃椒思心付て陰影の部

蕃椒思心付て陰影の部

蕃椒思心付て陰影の部

泉布
漁舟
素迪
藝大
女
寸
太
丸
高
窓
合
藝
太
敬
我
吐
月

秋風

くさけのそよみおのこ 霧の
晴るつ橋本をき 船路の
吹きおのそよみおのこ 霧の

襖卜
白酔
乙児

秋の風は秋の風か
あき風やあき風か
あき風やあき風か

吏登
吐月

あき風やあき風か
あき風やあき風か

馬勃

あき風やあき風か
あき風やあき風か

出飛
投茶

あき風やあき風か
あき風やあき風か

心祇

あき風やあき風か
あき風やあき風か

寥松

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

あき風やあき風か
あき風やあき風か

楚岸

待宵

まの宵やあつにをきぬし
待宵やあつにをきぬし
まの宵やあつにをきぬし
待宵やあつにをきぬし
まの宵やあつにをきぬし
待宵やあつにをきぬし
まの宵やあつにをきぬし
待宵やあつにをきぬし
まの宵やあつにをきぬし
待宵やあつにをきぬし

蓼太
故班象
阿人
吐月
午心
麥雨
嵐雪
全
吏登

月

月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし
月やまの宵にをきぬし

全
蓼太
亘交
紗羅
深松
歌白
普成
月巢
六窓
方壺
文足

明月や雨く代くまはあま
名月や仲子米搗形跡
名月やくく宵盃をんおはり
明月や十なりけ滝の聲
明月や橋をたぐすも秋の空
名月や晴るの後にまきそ
名月や晴るまきそこのまきそ
明月や大勢をまきそ清の空
明月や園くく庭の柱の音
名月や也相まきそつまきそ
名月や燈を消る風かつかり

婆城
月菜
吐月
魚汶
宜麥
午心
故班象
普成
祇川
蒼瓶
蓼太

中秋や日安くまき月おち
明月やいつくお園に人の音
名月や老子森芝の葉の音
明月や老くまきぬけりし
いさ碁くまき四つ子んまき月
いさ碁月人乃西をりし
捨子後世まき居るまき月
曉のあまも何くまき月
隈あま心社の癖こりまき月

文太
魚汶
蓼太
嘉好
月守
寥松
吐月
大江丸
司丸

案山子

鳴鳥斤羽よりしる世分の案
而折く世分を渡して障衣
吹おて遊の末傳ふ世分は
今影足れ大系ゆ伏家の世分は
大佛を白りておくる世分は
人ん地つくや世分の障衣は
おれ系を色を足る世分は
芝坪の案に吹あふる世分は
人ん子やま光のまかりは
筆善ひつあはく新き案山子は
今おれとてそのまかりは

月守
文牛
白麻
吐月
蝶羅
班象
文采
木芝
蓼太
夜兔
六窓

おもい乃橋を今まかりは
百姓よりハまかりて案山子は
古伝（まかり）遊ちりておれは
夕暮の何ん限るおれは
不細工此いん淋いんを
國西とゆくり中よき案山子は
流系を系を志あすくこの案
加茂川の系を志あすくこの案
而れ日をゆくり遊ちりておれは
十日おれ立てて尺くれ案山子は
秋風のあはり遊ちりておれは

念来
午人
善山
甚由
柘茂
月榮
吐月
風宜
糸汁
橋友
画障

鳴子

ねをこめて道りくちまきかし
 をのう田ハ膏てまう田さか
 腰ぬけの手いふあたる鳴子
 川河けて松の月ねや鳴子
 六のよに侍てまてあし鳴子
 五十九上子あるあし鳴子
 索更ふおね友も何ん鳴子
 曳てやふおき何りき鳴子
 而折くねまの字子字えは
 鳴子川くまに何りや鳴子
 家印つとまに何り鳴子

雪
 吐月
 東登
 外
 吐月
 年人
 梅仙
 雪
 聖口
 吐月

添水

鹿

新風は水を切くと添水く南
 流ぬふれ拵てきて水のり赤
 引板添ぬる園ふ眼の何る雪哉
 彌きくねねアおありり若の若
 くらあおのふふあ持まけ麻の若
 若まけを殊きく古あすぬ三民
 麻笛を都の人に貸すねあ那
 案せ合た心管々管こつ若乃若
 鹿笛此鹿まこりねく若あり
 何ちく向ふふあねて若の麻
 吹くく若乃若月や若乃若上廿
 射集

桑
 吐月
 沙
 吏
 桑
 桑
 全井
 周竹
 言
 月
 射集

松山やまは中より麻のたけ
わくみま本をけり麻のたけ
戸をきく遠山よせん麻の声
蕨のたけうしろ志くく月丸あ
小男蕨や河に流れて写る夕日山
ゆづり月あて息きく鹿のたけ
湯や人さく空くく麻子備
清射山の月とく麻の写る
麻のたけや月あて楯土消人とす
啼よりの麻のたけをくく木の根や
志せけハ木の陰あらん麻のたけ

蓼太 簀丈 郎娥 我月 歌白 月巢 洗水 完来 石髪 寥松 吐月

鷹

然しきにせめて入ぬ麻の山
若此書やま一里と只いさ
風林ぬおふくくくくく乃麻
小麻まくおの雲禁く嬉し
いつのたけにきて流るす小田
二羽くとかくく然し一
一をくくくハ田あくくく
をくくくや月の中ハ一羽
遠山を今もあきく小田乃
さ花しけ画とく免をくく

蓼太 吏登 青橘 星衣 吐月 蓼化 蝶夢 雷堂 牧丸 沙笠

玉可... 可... 可... 可...
 吹... 吹... 吹... 吹...
 痛... 痛... 痛... 痛...
 以... 以... 以... 以...
 柳... 柳... 柳... 柳...
 柳... 柳... 柳... 柳...
 去... 去... 去... 去...
 乃... 乃... 乃... 乃...
 一... 一... 一... 一...
 乃... 乃... 乃... 乃...
 乃... 乃... 乃... 乃...
 乃... 乃... 乃... 乃...

葵 不
 洗 月
 雪 堂
 京 花
 嗽 石
 稻 牛
 班 象
 柳 莊
 寥 松
 撫 琴
 午 心

流... 流... 流... 流...
 去... 去... 去... 去...
 去... 去... 去... 去...
 厚... 厚... 厚... 厚...

双 鳧
 牛 毛
 歡 支
 可 月

鶺鴒

鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒... 鶺鴒...

都 重

鳥 奴

同... 同... 同... 同...
 極... 極... 極... 極...
 友... 友... 友... 友...
 獨... 獨... 獨... 獨...

蓼 大
 錦 衣
 是 狗
 吐 月

衣の隙透侍り女の那
 風ありにおもふまきまき碇
 公のしを取てありぬ小碇
 里人の温泉に來て後小碇
 黒髪友の顔におもひきぬ小
 啄つきの里とありた碇うか
 人こもくらん月のか衣
 母乃碇をたけしぬくまれ
 直きより折れしり小碇
 老里の都よま耳つ碇
 是よりしりま波よせ碇

完来
 子交
 夜鬼
 午心
 文足
 不鷹
 寥松
 蚊牛
 其由
 蓼太
 全

松上月尾より碇字之り
 掃やむハ碇うかといさむらん
 をやきれたる月さきまき小碇
 右よりして碇のよきるわうか
 うち何けく浅月琴志名小
 そは京乃木のりさう小碇
 石の山木をよき碇うか
 石の山木をよき碇うか
 石の山木をよき碇うか
 石の山木をよき碇うか
 石の山木をよき碇うか

虚舟
 文足
 露澄
 不鷹
 達琴
 歌白
 木丈
 普成
 月巢
 吐月
 管雅

新綿

新酒

菊

色之ぬ松とくまきふは系
 目を友か〜色之は峰の松
 里ハ今強あ〜しき日如ハ
 まいとの指ねをま〜あ孫取
 永〜新酒ハ人乃疎やまき
 凝了ハ新酒の泡子ち〜たは
 去〜酒園ま〜い〜まぬあり
 美〜茶走〜き〜そ外ハ名〜存〜此
 菊好ヤ八日ハ菊て持〜ハ新
 公ま〜ヤ手打人〜と系人乃麓
 出〜く〜あ〜定〜ハ茶系の花

桃鏡
 松吹
 蓼太
 吐月
 嵐雪
 寥々松
 了浦
 嵐雪
 吏登
 天府
 藝太

上系ハ酒香あ〜り〜は新名
 了〜ハ白〜城〜あ〜ま〜そ〜ハ海色茶系の花
 雪城ハ〜ハ〜葉〜ハ〜ま〜く〜此〜茶
 葉を〜ハ〜ヤ〜茶系ハあ〜〜り〜茶
 同〜ハ日ハ〜あ〜〜ま〜こ〜茶系ハ茶
 き〜ハ〜ハ〜先〜茶系ハ茶切〜茶
 茶系ハ茶〜豆〜腐〜ハ〜ハ〜山〜里〜吾
 茶系ハ茶〜亦〜茶系ハ茶〜ま〜く〜の〜花
 折〜ハ〜花〜ハ〜ハ〜ハ〜茶系ハ茶
 大端〜ハ〜茶系ハ茶〜ハ〜茶系ハ茶
 投〜ハ〜茶系ハ茶〜ハ〜茶系ハ茶

青牛
 月守
 人左
 方壺
 雪珊
 阿人
 沙羅
 一兆
 一鷺
 月巢
 了浦

きく候や 容り 燐の 雲より 福

鷺雪

芭蕉

淡より 家より さくも 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に

蓼太 蝶夢 文足 草石 午心 普成 三思 蓼太 音橋

洛水

茸狩

用の 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に
あつと 衣に 破れ 世に

月巢 秋杵 吏登 羨玉 女須美 銀俣 吐月 夜鬼 嵐雪 吏飛

柿

栗

辻宮

井市

秋離

きの葉も時久しく柿は木末小

流柿よりよもろなり鳥よか

いらくらむまにまけるはの場

作麼生と焼栗たまふ小寺川

人志しぬ水お捨らう栗は越

後より七子供つきてる流り窓

辻宮や作く井代の雪意はし

松風市しそ強きりり 井の市

夕は秋よ暮るまきり 后の鈴

蓼太

二柳

嵐雪

月守

午心

月窓

沙羅

雪漁

午心

紅葉

花一枝折ありらる秋の終

人ありはゆりちあふまきり

山をくさるるふりてむらあ葉

さる木乃柿をさるるあ葉

か入る色はるあまもさるるあ

いつたりはあきやう控り初るあ

あま出りてあうらつらう夕もさ

一山のあは海まのてそみちる

ちりらるに度あやうあ葉

人の舟よ六洞きをもちあま

さるる根をさるるあ葉

雪守

蓼太

花調

子真

沙羅

山土

春鱈

普賢

故渡

得魚

歌

漸春子 逆枝 ときとみちの
妻木つ出里人 ときとみちの
洛外ハいつしとれさやめぬま
おほいさきとさきとさきと
とみちとさきとさきとさきと
幼とみちとさきとさきと
う敷て月の歌とさきとさきと
寺門さきとさきとさきと
砂とさきとさきとさきと
夕とみちとさきとさきと
細とみちとさきとさきと

一海音

白麻

婆心

深松

富屋

山辛

完来

宜麦

紫松

意長

ト水

吐月

午心

枝並

夜鬼

大江丸

沙舟

嵐雪

天府

山松

子代女

葉太

結

十三板

手折とさきとさきとさきと
揚河とさきとさきとさきと
風とさきとさきとさきと
手折とさきとさきとさきと
かきとさきとさきとさきと
河とさきとさきとさきと
おととさきとさきとさきと
かいとさきとさきとさきと
飯とさきとさきとさきと
着とさきとさきとさきと
川とさきとさきとさきと

待せぬも月の光に十之在 月巢
 かくぬくも水やほまらん 吐月
 今満くもくも秋や後の月 完来
 後の月子より夕を離れん 普成
 窓をぬくもほくも月を名残に 貞花
 此のさき此の目暮る後の月 沙衣
 空の腐るのせふ持る後の月 翠松
 持る後の窓をぬく後の月 夷門
 下戸へ来る扇の風や後の月 花明
 帷つぬ心よ秋何のち此月 蓼太
 月走も危をなまし十之在 不騫

柚味噌

秋霜

夜寒

秋もすくも横影をくも後の月 普成
 袖をけて里路をくもち此月 蓼太
 秋何のちやおまの柚味噌も柚より 今
 柿の心轉るも柚みそ耶 普成
 柚みそや淋しめ心友よちの 歌女
 秋も葉や落の中よりくも此月 寒松
 つくくと秋をり人や秋の来 北阜
 四十の酒のくもおれを 蓼太
 細布此里の心でおれを 人左
 富士をくも園に徑身つるおれを 萬鈴
 水もたに文る持るの秋をくも 普成

中か、まよふ火のねまき
 洞桶を屏乃くくねまき
 淋のぬき替火けくくねまき
 り焼く蝶の孫にまきねまき
 柳よりまきねまきねまき
 痛と神よりまきねまき
 浅月にまき火まきねまき
 大根の風まきまきねまき
 漏る瓦焼まきねまき
 ねまきまきまきねまき
 行信れ掛ぬ葉もねまき

蓼大
 完来
 亀二
 吐月
 三駱
 夷門
 時中
 五明
 寥松
 五柏
 普成

未枯

未枯や月れあれれれ日のはれ
 うく枯や海のくくねまき
 未枯やまきねまき
 うれやまきねまき
 まくれやまきねまき
 未枯やまきねまき
 うく枯や鳥むむねまき
 未の秋まきねまき
 うれまきねまき
 秋の落んぬまきねまき
 風心まきねまき

蓼大
 吐月
 午心
 京花
 木奴
 蕪村
 珠月
 吏登
 班象
 春蟻
 秋鬼

新秋

秋のろれ石山さすは 清のそは
 道回しは一里くとあまきれ香
 清つぎにいづれ下まぶれ 秋のくれ
 秋のくれ女房のほくらん付たり
 何と云ふ物も尺くは 秋のくせ
 夕多てく秋高き松とあまりり
 門きくく傳の角カやあまきの夕
 見まのせまありり 秋のくれ
 とけもあまき 圓の傳りり 秋の夕
 秋の夕死してき 娘ハ女ノ郎
 角カとる直ささるり 秋のそ香

嵐雪
 蓼太
 魯洲
 氷花
 月巢
 吐月
 秋良
 蓼主
 天社庵
 寒松
 故班象

清のそはく 淋し 秋の夕 天房
 秋のくれ梅乃枯葉に襟子也
 あまき夕みりり 傳りり 度りり
 神掬くもれまりり 秋のくれ
 ほくくは 向かもまやあまきれ香
 報急けお都のひりり 秋の夕
 鈴くはる 犯しとまあまきれ
 行麻人まつりや 秋の夕
 紫陽花乃葉のほきりり 秋の夕
 杖曳て何とあまきの夕とあ

月彦
 眠石
 月窓
 婦景
 故六
 普成
 信夫
 菅雅
 蓼太

行秋

申く秋や連とよいとあまも七
り秋は為し多にほりけり
り秋七も一をとおしたるあま
ゆゑ旅や水田は身て山の月
り秋やん子草此おし
り秋や雪のりら乃菜大根
り秋にみくもあはる藁 椒
ゆゑ秋や雪のりら乃菜大根
船控り秋をりこま上川
秋おむねま秋ふよめ整頓の案
噴のるゆつて秋のりあつ南

更み豆
不審
叶月
竹條
歌白
富屋
桃壺
南羅
夜兔
訂雨
翠兒

九月盡

と秋のりて川をよる人や雪の秋
をさや秋末のりら秋をゆく
破くはは袋屋へ秋のりあは
は程せし川風をよる九月を
秋のり腕のりよるおしり九月を
夕ぐれをば集て九月晦日のけ
何思ふらんそ九月三十日は秋
油打のけりきとあうし九月を
左あやうにあらぬ都の九月を

桂直
素迪
乙兒
連大
桃祖
木羽
素迪
大河
完来

北段句類取

冬部

十月

音顧盧了浦編輯
八景園寥松刪定

初冬

初冬の横ふ入るやまきりけり

夢冬

時雨

のつげよ日の暮るるは時雨

更雪

極まじく松を志ぬくや初

夢冬

鳥来むらふ葉に天を思ふ

吐月

又まじく松を志ぬくや初

乙児

夕暮るる初

沙羅

二つや北山

日守

いふ一の時をせんせうと松
 時を来り又志をけり夕の那
 きらくく一室をを渡り初時白
 是よりあそぶ京の唐に世神りれ
 降るあて松をたまわれぬ時白井
 花子と人淋しとせうしれれ
 春豆のあそび時をわの那
 卯のあそび時をわの那
 豆のあそび時をわの那
 色もあそび時をわの那
 花子と人淋しとせうしれれ

宇平
 完来
 大江丸
 午心
 仙菓
 雨老
 寥松
 菊盤
 藝大
 班象
 莎笠

小室の家の中へくときの時を
 傘持下り日乃漏しとれう素
 夕練して園をくときの時を
 卯のあそび時をわの那
 軒のあそび時をわの那
 松のあそび時をわの那
 やうなれとときとれ
 おもひやいつくときとれ
 是きつとときとれ
 小室の家の中へくときの時を
 夕練して園をくときの時を
 卯のあそび時をわの那
 軒のあそび時をわの那
 松のあそび時をわの那
 やうなれとときとれ
 おもひやいつくときとれ
 是きつとときとれ

春州
 波光
 連大
 也
 迄賀
 文鱗
 六窓
 文交
 吐月
 銀身
 成義

西山を為すかして降る時 川上氏 不白
 阿のきし いそぬ老をいつ時 鳥 月巢
 清き水もささるる 山 眉山
 何人の梅の枝をそよ 太 蓼太
 神のすゝ古休を 牛 蚊牛
 積のまじふ 物 講物
 あゝ海や 王 牙
 鸞を 蓮 蓮依
 一 素 素迪
 心 四 四明
 射 集 射集

冬 日

秋の葉の赤き 菊 菊雅
 一 柳 柳如
 け 葉 葉太
 冬 更 更冬
 文 夕 夕染
 冬 沙 沙南
 冬 柳 柳紫
 冬 菅 菅雅
 冬 梅 梅堂
 冬 派 派堂
 冬 菱 菱後

埋火

居候遊て岩すおろ大浦ハ
朝毎子朝りしき大津ク赤
くく大や床子心の古反古
埋火七字身たつおつて畏
くく古や石ぬんはたのい
埋火や似博ふうあてし
又くおセ岩をて岩を碑く
岩電やよ七折りてよの松
岩多や息く淋一岩乃枝
深山木や又墓ひちと碑く
山岩七毛きを後の岩く

月古
金龜
故
百理
阿
人左
茶茶
吐月
舞牛
連牛
木奴

山灰

山灰をて科あき里へ入る
まね岩や後之影く又山
枝岩や深山おもつて岩の角
似博の岩くねむくまとの那
山灰くく山一て山ぬあおの病
山灰手あまの山子あまの山
山灰の大や孫足之の墓城掃控ん
山灰ん足く掃く山あや山
山灰つた山掃く山よ山灰
まろく山とすく山山山
まろく山とすく山山山

布園
倉衣

完来
巴人
宜麦
年心
山今松
六之来
差特
山今
桑太
山人
鳳石

あまきけとやよもの紙念
たふす此樹と若く念ふ南
我子易かぬ念もすむもの
あともて心せよふはゆい
らも若せて物流るる紙念
らも若お争ひをむふらん
古は念の只中に念の跡のぬ
山は念樵夫の念の念の所
念の浦の念の念の念の念
神んも人か念の念の念
物いゝ念人の念の念の念

星次魚
文是
念松
素之
善成
社月
念宮
葉太
那象
吟月
此思

足袋
小春

懐けりて念も念も念も
有明く月も小春子連日
梅をハ夕日此多ぬ小春
二日星と日障り小春の那
枝芽や鳥は念も念も念
小春の心かゝる念も念も念
植木念も念も念も念も念
り念も念も念も念も念
淋し念の念の念の念の花
枇杷の念も念も念も念も
つまゝ念も念も念も念も

霜記
一語
吐月
年心
念松
月念
念木
念雪
葉太
梅也
吐月

石菖花
枇杷花
山茶花

連之忌

山家老やをのれはくは花の巻
 きんあや一りん嘆てまの忘
 折りいふも山家老ハ冬木ハ
 遠之忌や鄭然く引茶大松
 遠之忌やうはし度茶も十
 遠之忌や壁に船のあゝ破き与
 遠之忌や人乃又舟ぬ五日月
 我恋とば女にありし十夜ハ
 家と老の十ね子刺て七字ハ
 十松く母あゝ児とおをいりり
 昔まはありのとるき十ねうと
 川河郎

年人
 多お
 家松
 茶大
 吐月
 完来
 年心
 茶大
 文足
 文牛

十夜

嘆の風屋林君たる十松ハ 吐月

古今講

夷講

古今講子あ房ハ幼日と振る
 夷講 智の上戸を又付り
 夷講 海嵐は骨にありハ
 夷講 心急の何ふハ夷講
 七ハ 冠の振折ハ心取越
 夷講 心急の何ふハ夷講
 夷講 心急の何ふハ夷講

江魚
 六窓
 完来
 大江地
 文足
 一踏
 完来
 菅雅
 菅大

夷越

冬牡丹

夷講 心急の何ふハ夷講

風

旅人の懐ちりりたる風はふい
 山間子吹合せりり夕暮葉推
 都るに秋きれつる葉推
 一日乃風速く暮葉推り
 暮葉推津久性を語り
 木くりに楮の材乃名跡
 風や流せん人えぬ葉推
 木くりに水田りまの月
 木くりに水も星は水月
 木くりに土は喰入る月
 風や風を七月の小お嵐
 楚相

改
 度
 至
 完
 莎
 嵐
 史
 葉
 夢
 吐
 楚

枯野

木の葉も口に冷をめて小
 風の樹り根も何れも
 倉門の風を流す風日
 こころも土ぬいす嵐を漕
 木の葉のなきくも山の高
 風や何れも世も帆も
 こころも風を大くも
 風乃樹を割る月ねる
 木くりにや公招の上の
 物来は松見ており枯野
 人通るおのふれ枯野

菊
 松
 祇
 巴
 秋
 蓼
 都
 柏
 南
 吐
 蓼

冬枯

お庭の孔雀をあれを北に
伐たせりあま木踏り冬枯
冬枯や七落子何つらう田之反
あま枯や日れ新そよ橋 枯
冬枯や替女のあまつら山
野乃りうも空を何し
天の川を何れぬまききり
り燃し新割の廊の空を
空の上おや人子幅あまけり
家ありとまを大空にや山の陰
連のあまうも空をさし

沙路
窓松
者而
轍之
満良
吏登
月守
班象
玉水
乙二
蘭秀

措

頼

梅壺を空むらり記をう
措を孫てふれたまはる
措の大や君在ぬ大 山 刀
埋本よ成るおのの措大
我門とこるのあまつら
朝明や四あまもつら
十月を頼の月とつら
冬老福者や入るつら
朝もや頼のあまつら
ゆけやうつら
頼けや人子つら

了補
窓松
岩水
参助
左株
鳥兆
月巢
大江丸
吐月
牟心
祖東

直典引

散紅葉

縁之を佛もふもあふりり
 めめしきお奥の大おまほひ
 三井の藤字て下りお奥引
 ちたてく門の何んやあもち
 帆仗のよおまちりの道屋
 かく深き河ハきしきよちの
 ちたて石ハ風の中こちりも
 世のりのたのれくや細代
 なききくみ人ハいさ細代
 世の中お子も佳く人ハ細代
 さハ判らんてもああさ

大江丸
 氷花
 定来
 夢太
 春江
 吐月
 夢差
 夢太
 大江丸
 定来
 夢差

細代守

跡

中ノよ 啞ハガにめハ
 世はりくと只よても細代
 溜捲つる思付をあらう何
 さあとのよせてたん細代
 浅月ふもあつる居也何守
 あハ本ヤさしり何朽も
 君アよ也あまのよ草の梅
 草ヤあははあああああ
 唐お尼のあまのよあはは
 浅月の齒子透通る男う那
 よあははあああああ

草葉漬

何さつけ
頭巾

中ノよ 啞ハガにめハ
 世はりくと只よても細代
 溜捲つる思付をあらう何
 さあとのよせてたん細代
 浅月ふもあつる居也何守
 あハ本ヤさしり何朽も
 君アよ也あまのよ草の梅
 草ヤあははあああああ
 唐お尼のあまのよあはは
 浅月の齒子透通る男う那
 よあははあああああ

雪丸
 情車
 左席
 不知
 吐月
 案松
 嵐雪
 何死
 夢太
 夢太
 夢太

冬籠

似憐の多ふとれて路中う南
路中ぬる月印もつづき集りてん
およきくと路中のたつて海へ毎
まぬ人のいふと目もたつて路中
おもひよきて月見よあつて冬籠
火の味もいふつこけよ冬籠あり
羽筆のこころも果よふゆあま
陰櫃の味をこちりり冬籠
燈のよおし松風もあつて冬籠
冬籠のこころもあつてはうり冬籠
志願のこころもあつてはうり冬籠

夢多太
蕪村
對賀
金井
夢多太
六窓
吐月
完未
象多松
青牛
月巢

りも七多んと伸一たり冬籠
多列を甚きとせあつて冬籠
す一何とて人の中もあつて冬籠
業あつて冬籠とありあつて冬籠
是も多しなむあつて冬籠
みより子に事ありは林も冬籠
作も多しなむあつて冬籠
字は山やたもく生て冬籠
茶畑もあつて冬籠
冬籠の味もあつて冬籠
又一もあつて冬籠

北阜
高成
之子美
梧泉
雪珊
普成
甚夕
川居
秋杵
師心
文足

千鳥

我子揚子ゆくりりまをの
を一分て月ききあきわくふき
志はしくい江を全おま何川衛
をきききり者何の浦きり
流りりや盒子ぬきりり川子き
月を一分て波子きりりの清
子ききき相をいりり汁わりり山
浦ききき友にありりり川子き
進りけりりまを風とわきき
川ききやりりりりりりりりり
きききけりりりりりりりりり

曲 朧
蓼 太
完 来
達 琴
枳 怨
樂 我
月 泉
文 母
茶 籃
牛 毛
其 時 雨

水鳥

杉風の沖りり房りりりりり
似りりりりりりりりりりりり
子りりりりりりりりりりりり
虎りりりりりりりりりりりり
妹りりりりりりりりりりりり
友りりりりりりりりりりりり
十はりりりりりりりりりりり
終りりりりりりりりりりりり
鴨りりりりりりりりりりりり
水りりりりりりりりりりりり
安りりりりりりりりりりりり

東 芽
六 窓
蓼 主
方 壺
塩 車
蓼 太
寥 松
嵐 雪
蓼 太
司 丸
年 心

海嵐

月をねむれぬ七草海嵐の
砂の中をまゝ遊歩り海嵐の
色をばばるるさあはるあまこ
字あはし海嵐の家をまゝい
うたふは泡やまよこに接せん
大根川よふ果をまゝい

木羽 月巢 吐月 午心 松欵 菅雅 柴立 大江丸 吐月 嵐雪

大根引

土蒸 冬月 喜人のあはれくれつ七草
字月やかゝるし挿ふかゝ卵
冬月標の本系ははるまゝ
字をばるるあはる冬月

沙羅 吐月 因是 完来 月巢 我友

土蒸 冬月

喜人のあはれくれつ七草
字月やかゝるし挿ふかゝ卵
冬月標の本系ははるまゝ
字をばるるあはる冬月

寥松 大江丸 普成 寥松

冬に此月人をもたおれて遊ねり
ふ色の月山本くき木の月
冬月くくしとおまおまの程
くちさて水流るるまの月
徳よりしてお整しうんを月
法をさうして冬は月おど
冬月啼声の鳥の飛ねる那
おとんねた我は照し冬の月
冬のねや月のあまのあひう
天孫の船浮世を冬は月
門あけし後もいん冬の月

吳聖
鳥山
蚊牛
陶京
沙飛
了臺
嗔長
良娥
蓼阿
之道
深松

帆柱のおよそあふふ此月
夏人かたぬぬ癒を冬は月
とさしてんんをさうく冬は月
いしてんんをさうく冬は月
冬の月みとうんをさうく冬は月
あつましりあをさうく冬は月
いそあし陸りしてふあ月
くくくく心のほふく冬は月
冬の月おほまをさうく冬は月

青朝
鯉半
雷堂
雁赤
三鶴
系丸
梅堂
一鷺
曉長

十二月

十月のさめく冬人あひう

完末

みら田

木の枝ふき葉を枯りて冬田うま

吐月

枯芦

枯芦やりをかきり余り

吐月

枯柳

枯くて月を柳の浅ねり

素夕

干菜

干菜の久透てきし

李蹊

紙衣

紙衣の久透てきし

野叟

納豆

納豆やうてハ

完来

霜

霜の月を

山嵐雪

十一月



今ハ世を暮りて冬田うま

冬田うま

冬田うま

冬田うま

冬田うま

冬田うま

冬田うま

冬田うま

冬田うま

冬田うま

冬田うま

冬田うま

茶食

丹頂の朝日いしく冬至は
竈神の松主かきり冬至は
多き朝の石のふらふらて冬至は
いふ一ひ初日のまきり冬至は
下初等り 斬きりし茶食
月をた小宿おひやくまきり
能多き老とまきり茶食
是七又まきりし茶食
くくくくくくくくくくく
家も我死し相けん茶食
うんうんうんうんうんうん

吐月 寥松 丈水 路茶 蓼太 班象 蓼主 君山 月巢 文母 吐月

曆賣 鷓鴣

寒梅

茶食の毛衣いやくく
くまきりうんうんうん
曆うんうんうんうん
海の餅にまきりし茶食
おぬまきりし茶食
みまきりし茶食
蓬草の心まきりし茶食
寒梅の心まきりし茶食
行持まきりし茶食
稚鹿の心まきりし茶食
人まきりし茶食

蚊牛 菅雅 寥松 吏登 蓼太 吐月 之厚 蓼太 鳴鼻 連丈 杉明

信中

鯨

鯨のせやいふはしるもも
初めせやきりて花
顔のせや見えしはく
の月みせや子ありし
蒼芽はれ松も生けし
車揚て海ありしは
初をんふし人の花
葉の花や強河もゆ
葉の花や一畝の葉
葉の花や日ふ能く
葉はもや大根自
て

山市
一鹭
其時雨
吐月
月守
海曉
雪山
完来
豪山
了浦
蝶夢

茶花

冬 蠟

冬 木立

冬 川

寒 垢離

雜 冬

影 夕置

蠟のてりてをりて冬
てりてをりてをりて冬
冬川や枝のありし
世は積りて里を
雪垢離やうき
花の月を
根の月を
ぬくもはれは
影夕置や
てりてをりてをりて冬

寒
社
宦
維
豪
午
班
氷
丸
蓼
吐
夢
山
月
籠
迪
山
心
象
花
丸
太
月

ありやふふ新をくそは松
つつけぬ及ふまよけれをつんぬ
以月

山越してふとれたるひや雪は雪
月古

松ふまふ五人かろや雪は雪
古松

越き大ふそ初つれをれは
又は

障喜ハ中しはき松やあまの雪
築松

を尺五丈をそ及あり雪は雪
ふま

をぬの中にくく雪は雪士
松冊

月よあまの雪の松馬あすこ
まは

松松松や雪まこほるそはけ
大江地

門の雪竹川起すまふそはけ
松松象

伍あふふりおすそは雪の夕りか
松松太

を月をふそあつて二日月松は
松松

松まふそまふそつてりる松松松
松松

ふそまふ松松松松松松松松
松松松

まふ松松松松松松松松松松
松松松

あつ松松松松松松松松松松
松松松

夕松松松松松松松松松松松
松松松

ふ松松松松松松松松松松松
松松松

松松松松松松松松松松松松
松松松

かきく人いさふ人他れ園の香
そのころは陸持くくとね乃を
林たきうゝ雪はほ雪はうりう
雪をゆゝ都の雪ねをりーに
雪の雪久しーくねを影ひく
雪の雪く都の雪はうりさむり
ねをゆゝ雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり

雪香
生花
我々
玉雪
雪古
仙衣
川衣
砂月
一峰
茨小冬
紙風

雪を播よそく何うくね柑子
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり
雪の雪く都の雪はうりさむり

東念
月古
雪香
雪香
雪香
雪香
雪香
雪香
雪香
雪香
雪香
雪香
雪香

霰霰

を車川の流を流るや里は太
武たれ是了果とく主敷り
を子あねとくも葉の葉よと
山風やを葉の吹を了叶身
月七亦逐ふく照を葉の
くくく火の葉を了葉の
かくく葉の吹を了葉の
正葉の代くくくく神出噴
西くくく神あり里神出
息はや福くくくくく
能くくくくくくくく

漢 柳
風 香
葉 太
大 魯
小 柳
柳 葉
嵐 雪
雀 鳥
秋 柳
文 足

神樂

神樂女也子婦く持る歌せむ

年 心

鉢 扣

今かー年より乃くー神たき
まくくくくくくくくく
あつふとくくくくくく
梅あえてくくくくく
神子あつふとくくくく
飛込てくくくくく
傘かーくくくくく
神身とくくくくく
横くくくくく

嵐 雪
吏 鳥
葉 太
松 柳
乙 児
司 丸
吐 月
砂 月
之 葉 柳

石花

下手も早く上手も足るは沖打
もろたふぶ部家トオ相ド
身を折るよ下流たく面は津打
ふまのく石花をかくしはあみ
似蝶の清梅流一後お乃塔

百流
年心
海心
嵐心
心

垢子磁のつめふも赤令下る奈

出肺

十二月

紫々菊

さききくや水を花水のつり水

葉古

さきとまや奈うとせし強の先 女花流

雪声

寒念佛

さき声を以切時り鬼をい介
さき声の恨り如くは似蝶
道指を記さおも何りさき念仏
おまゆ中ふあり何りさき念仏
角々あり大何何りさき念仏

白麻
吐月
天府
蓼太
玉庭

礎に泣 おも何んさき念仏
下ろおぬおのこおよしさき念仏
雪影の体起りさき寒念仏

雪珊

完未

又二つ門さきさき寒念仏

子交

臘八

臘八は曉ぬる新あし
臘八は粥の強仕も飯守子

眠江
秋色
汐花

俳名

備ハハおひて足れを望む
 臘ハハ羽而を味等の才一飛
 佛名やおふぬふ七死の奴
 仏名や清りせし八花を雪
 仏名や神の乱もるまの縁
 仏名よふらてすや雪の影
 桜久々花をさしとるまの
 高きや人に果てしむるま
 天子にや一雪ふとく時春
 心ししとるまは申御也
 朱つふふとるまぬまのま

葉之
 林 丈
 深心
 文三
 秋杵
 達琴
 葉太
 以月
 不雪
 葉太
 柳宗

節季候

年内春

追儼

年新

師走

有明やまの雪の月影
 春の身と隅田の年波ゆくは
 厄拂 泣ハ隈なき月おら素
 雪ふやおきく ちきねの雪
 流くま極くまはれよはは果
 陵を掃てとるまは木極
 山伏の雪ふまおまはれは
 下後よおはれまは師走は
 雪のまらふ雪りてはまら
 杉風并世よまはれはは
 急う雪くま世の人まはれは

吐月
 沙羅
 蓼太
 東鳥
 完未
 都英
 嵐雪
 寒松
 方壺
 蓼太
 素丸

納豆配
煤掃

月七日山掃又々々海老の卵
 詠はたや柳の糸はをの南
 浄破利の氷より〜海老に
 雪の日も傘あり下ハ海老を
 うきなに舞う川合の師走に
 秋の上空やあけを海老は
 大衆を盲目の掃海老は
 吟つげを又々々海老の月夜に
 納豆配 五々川と掃海老に
 又々掃や竹を伐見十三日
 又々掃は依尺の海老は

桑 月 葉 吐 班 象 馬 光 山 舟 豆 海 三 橋

年の市

又々掃にのけて又々の日
 篠のりや都掃とあまを海
 又々〜人々逢へりすまの
 又々掃はか〜青牛
 篠掃や長刀あけ〜尚美
 時を〜海老を吐月の市
 と〜のちや又々掃を推し偶丹
 又々〜竹や又々掃を推し
 今年何れ哉と又々掃は死
 花より掃ま〜糸をねり
 糸は時あり〜糸をねり

心 吐 班 象 青牛 尚美 吐月 苙丹 完来 蓼太 寥松 玉宇

夜配

年忘

俗も世も捨てたれど忘れ
 死にぬぬも先へゆくきり
 おまに汲年忘井の後の家
 二ねと六子もぬいさう
 みも子も孫もて出さぬ
 年忘れぬも葉は外の花はぬ
 年忘れぬもれさう少ぬ
 孫ぬに孫は六も一も
 忘れぬもぬ男もぬ
 煙火を基盤して
 吹く風もぬ

吐月
 分年
 蓼太
 月守
 夏炉
 班象
 宜妻
 以月
 信中
 柳莊
 不塞
 宜妻

餅搗

餅つきや多かき
 餅の白
 吐月
 升古

行年

りとやとやとつれの松も落
 遠くもあつとや
 ゆく年や職人町は
 けとやいや

普成
 蓼太
 午心
 物我

年の暮

猿猴のふもふもか
 抄小木のぬも
 嵐雪
 更登
 完来

波豆伝言の河もむつうや年此言
つらむれ海つらむれをこのれ
小娘の梅くまや雪一りくき
西行乃いつちりらん年此言
畑の葉れんつよまよやのれ
お好むるに静き一年の言
年のはれ車はる羽子あつらう

蓼 大
吐 月
寥 松
其 桂
蓮 佐
普 城
完 来

大晦日

みま子に接ぎ果一古無日
今忘れろ梅小本廿一六廿日
そこのぬ庵員一六三十日

午 心
任 柳
祇 風

終年

終年や人をい多てきり 降 不塞

岡見

岡見すく味つくゆいぬ小家の門 嵐雪
我星此家よむふんあそん心 一 鷺

和布刈

宝船

二艘とハ欵古井ありれら重うぬ 吐 月
計の代よ陽すまれおたりく船 完 来
梅一アん入そあよ重のいそぬハ 蓼 大
と一のきお山と降ふ但やたり 午 心

年尾混交

魚餅の毒中をくぐりて魚の宿
方かきくそきふ灯七とりしり
おきまるとしれくそきふ宿
魚 二
魚 汶
午 心

極月也門にづくく在御る
寥 松

そふ封き。年姑小判のき
了 輔

風流と字阿との名ありふ
蓼 太

鞍部

酒もあも忘き川た。念佛ハ
沙 羅

嘘也何よそれ名ふ人たを
寥 松



笠句類聚後

上野をさきさきする四十町さうめ川
さき尾久といふ里あり 笠川乃
泳みたふてのりさいと清く白く
とる 菊火をさきぬ黒津を見る
心ちすさむ本傳ふる言ふに麻
うつめらるあを色えむいそむをを
まらふるあを地なるま

いつの冬もやまこふさしは就かてる備の
業とらき耕せるとやうにうたあう
朱氏の忠告は孫をあるものあら
社を直すは福をささぐはれた
人の心はたまたま外におさあ
かのう藏かしてはめい、美濃志の
かりともくしるるは福あるもの
深川は携りてお墨子剛に

求ふたうまはしひなはし
いつてあいまはまむてあ
手まらしはあしは物難のた
を物あてはあしは市は
人ともんちあはま
常子とすはあしは
いしはあふてはやく事
成るはあは精もあつて業

來之至也亦不之
 字化下印在林七月
 高也

雪中梅



天下 一物 登龍丸 一包代百文
 一方 一物 登龍丸 一包代百文

此丸之功效... 凡人... 氣血... 精神... 衰弱... 宜服... 此丸... 功效... 神速... 誠為... 濟世... 之良藥... 也...

病延命をうらむに方人用ひ試て生功の本多の古今
 希代不名候の妙業之生功先小なる候
 一十年廿年為息 一勞迄の候
 一咽候せりつと
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一十年廿年為息 一勞迄の候
 一咽候せりつと
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝
 一効氣はく心肝

東叡山 御書物所

江戸下谷御成道

青雲堂英文藏製

東叡山御書物所	出雲守文治所	長谷川武吉所	大森次吉所
河内屋武吉所	出羽山形守日所	大板屋武吉所	
山本屋伊兵衛所	信濃守武吉所	和名屋武吉所	
道具屋重吉所	日松守	友松屋武吉所	
大浦屋武吉所	日松守吉所	小井屋吉所	
戸持屋只助	日上四	付屋吉所	
中津屋守助	越後守吉所	扇屋七吉所	
山本屋孫守所	日吉守	信屋吉所	
玉屋吉所	下野依野吉所	堀屋吉所	
角屋吉所	半陸土浦	橋本吉所	
伊勢屋守吉所	吉守吉所	津本屋吉所	
御書物所	御書物所	御書物所	
御書物所	御書物所	御書物所	

